



報告

# 全学共通教育における学生による授業評価と 授業改善のシステム

桑折範彦、佐野勝徳、松谷満、村田明広、桂修治、平井松午  
(徳島大学 全学共通教育センター)

## 1. はじめに

徳島大学全学共通教育(以下、共通教育と記載する)では、2001(平成13)年度後期より全学共通教育において学生による授業評価アンケートを延べ8学期にわたって継続して実施してきた。また、2002(平成14)年度には、3年生に対して全学共通教育に関するアンケートを行い、同時に、教員にも「授業改善に関するアンケート」を行った。この稿では、共通教育における授業評価の全体像や在り方、授業評価の現状と授業改善のシステムに関する概要をまとめて、今後の方向性を考える資料とする。

## 2. 共通教育における授業改善のためのシステム

大学教育は、マスの時代からユニバーサルの時代となり、急速に変化している。教員が自由にレベルを設定して授業を行い、学生が自ら取捨選択し学ぶ、エリートの時代の教育と異なる。現在は、大学が学習の目的・目標を明確に示し、教員はその達成を学生に求め、社会における高等教育の役割を果たすような教育が求められている。そのために、大学は授業の質を目的に合うように改革し、学生の知識レベルの向上と能力開発について学生の満足が得られるものにしていくことが必要となってきている。

徳島大学の共通教育を中心とする授業の改善のためのシステムは、図1に示すようなサイクルを形成している。(a)学生の授業評価、教員の授業実施報告書、(b)結果のフィードバック、(c)教員の授業力開発が重要な要素である。以下に、

これらの要素を中心に経緯、現状等について検討する。

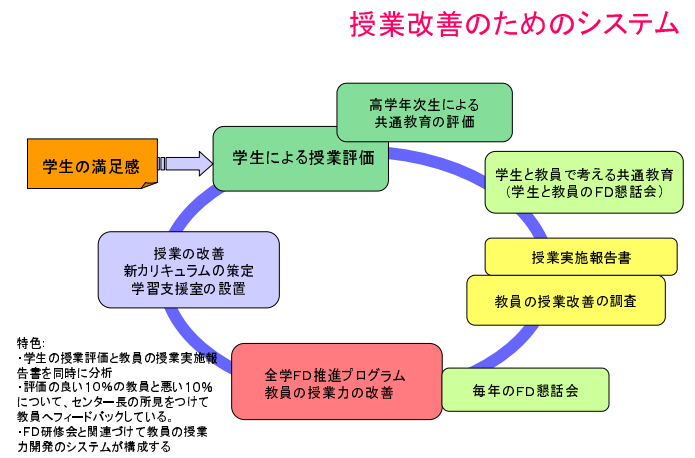


図1. 授業改善のためのシステム

## 3. 学生による授業評価の導入

徳島大学での学生による授業評価アンケートと教員の授業力開発に関わる流れは、1993(平成5)年に教養部を改組することに伴って、一般教育に関するアンケート調査を学生に対して実施したことから始まったと言える(1)。また、改組直後から、全学共通教育懇話会を開催し、当時としては相当早い時期にFD(ファカルティ・ディベロップメント)を行った(2)。国際基督教大学の原教授を迎えて「ICUの授業評価アンケート」に関する話を伺ったことは、先進的であった。

共通教育での学生による授業評価等のアンケートの実施状況を表1にまとめた。教養部改組に伴う教養教育の検証のために、1996(平成8)年と1998(平成10)年に学生、教員へのアンケート調査を行った(3,4)。1998(平成10)年には、

その調査結果も含めて、全学共通教育に関して外部評価を受けている(5)。2000(平成12)年には、「外国語教育改善のためのアンケート」を実施して、外国語特に英語教育改善に関する意向を調査した(6)。これらの調査は個々の授業の評価・改善を目指したものでなく、教育課程や科目に関する状況を総合的に評価してその改善を検討するためのものであった。

2002年に行われた、大学評価・学位授与機構による全学テーマ別評価「教養教育」では、自己評価書(7)の記載にあたって、その根拠資料が求められていた。根拠資料として、幾つかのアンケートを実施した。学生の共通教育に関するアンケート(3年生)(8)、また教員に対しても、授業改善の試みに関するアンケートも行った(9)。各学部学科の教員にも共通教育への期待とその成果の評価についてアンケートを実施している(10)。

そのような中で、学生による授業評価アンケー

トを実施することは、その後の評価の基礎的資料としても、また具体的に授業を改善するためにも、必要なこととして、実施を検討した。2001年に全学共通教育センター運営委員会において、学生による授業評価アンケートを実施することに決定し、後期に教養科目から行うこととした。全授業を毎学期アンケートすることは、実施側にも負荷が高いと予想され、また学生側にも、特に共通教育では受講講義数が多いので、アンケートの数が多くなることを避けて、(a)教養科目、(b)外国語科目、(c)基礎教育科目・健康スポーツ科目の3区分(各学期の全授業数の約1/3程度)に分けて、各学期に順に実施することとした。これにより、1回毎の科目群が絞られて、分析しやすくなることも考えられた。

評価の項目は、授業科目によって少し異なる部分もあるが、(a)自分自身に対する評価、(b)教師に対する評価、(c)充足度と意欲促進に関する15項目程度のものである。

表1. 学生による授業評価とファカルティ・ディベロップメント



図2. 授業評価アンケートの教員への報告の形式

図3. 授業評価の順位図

教員へのアンケート結果の報告は図2に示すように、アンケートの集計のみでなく、各科目群での平均値との比較、授業の成績分布、授業実施に伴う情報も併せて報告している。

共通教育センター長から、主に、学生の満足度に関する所見と成績評価の偏りに関する所見を教員にフィードバックしている。図3に示すような、評価点を学生の授業に臨む姿勢、教員の熱意、満足度・充足度に対して平均値を求め、順に並べてみると、評価の高い授業と低い授業の夫々約10%程度は大体区別ができる。科目群によって評価の高低があるので、各科目群の中での概ね相対的な評価に基づいて所見を記載している。

学生の評価の高かった教員のリストを2002年

度より示している。その人数は次のとおりである。同じ教員が複数の授業を担当している場合もあるので、評価の高かった授業数はこれより多い。

- |          |          |  |
|----------|----------|--|
| 2002 年前期 | 基礎教育科目   | 数学5人, 物理学2人, 化学2人, 生物学1人               |
|          | 健康スポーツ科目 | 6人                                     |
| 2002 年後期 | 外国語科目    | 英語11人, ドイツ語3人, 中国語4人                   |
| 2003 年前期 | 教養科目     | 人文科学6人, 社会科学8人, 自然科学4人, 情報科学1人, 総合分野1人 |
| 2003 年後期 | 基礎教育科目   | 数学1人, 物理学2人, 生物学実験1人                   |
|          | 健康スポーツ科目 | 2人                                     |
| 2004 年前期 | 外国語科目    | 英語7人, ドイツ                              |

	語 2人, 中国語 4人
2004 年後期	教養科目 人文科学 5人, 社会科学 12人, 自然科学 3人, 情報科学 1人, ゼミナール科目 4人
2005 年前期	基礎科目 数学 4人, 物理学 1人, 情報科学 2人 ウェルネス総合演習 3人

評価結果の報告には、学生の意見をそのまま記載して担当教員へ知らせている。これについては、教員側も、クラスサイズや多くの意見か1人の意見か、極端な意見か、甘すぎる見方なのか等、学生の意見を適切に受け止める必要がある。

ここで実施している授業評価は、教員の業績評価に反映されるものではなく、あくまでも学生にも教員にも授業改善を目的とするものである。その意味では、これによりどれだけ授業が改善されているかが問われることになろう(11)。中間アンケートの分析(12)では、評価が低い傾向にある基礎科目について、過去3回の評価の経時変化において満足度等で改善が見られること、評価の低かった教員が次の期にも低い場合は少ないことなどから、授業評価を実施する以前と現在では、全体として授業は良くなっていると考えられる。やはり教員としては学生の評価は意識せざるを得ないということであろう。

#### 4. 授業方法に関する中間アンケートの実施

表1に示してあるように、2004(平成16)年度後期から、授業方法に関する中間アンケートを実施することにした。これは、2003(平成15)年に河合塾による「学生による授業評価」事例研究会(13)において、徳島大学の事例を報告し、その時のまとめにおいて、学生へのフィードバックを検討する中で、提案されたものである。

一般に、授業評価は学期末に行われるので、そ

の期の授業には結果が反映されない。学生にとっては、現に受けている授業が改善されることが重要である。そこで、授業の方法に限って(実際、具体的で比較的改善しやすい、応じやすい項目：(1)授業の目的の明確さ (2)発声の明瞭さ (3)板書の読みやすさ (4)資料の分かりやすさ (5)授業時間の適切さ (6)説明の分かりやすさ)アンケートして、その集計を直ぐに教員に渡して、学生の意見はカードのまま渡して、その結果について、次の授業で学生に説明する。その説明内容をセンター長に報告するようにした。これで、学生も授業方法について改善が期待できることになる。また、中間アンケートの要望などが授業に反映されたか、授業が改善されたかを、学期末の授業評価アンケートで問うようにして、実効が上がるようにしている。中間アンケートの授業改善への効果についての分析は別稿に詳しくまとめたが(11)、その効果は教養科目群よりも基礎課目群において見られている。中間アンケートを組織的に実施しているケースは全国的に見ても少ないが、学生にとって現に受けている授業の改善が期待できる点で大きな利点がある。徳島大学では、各学期の約1/3の授業について授業評価を行っていることもあって、中間と学期末にアンケートが可能なのである。今後更に中間アンケートによる授業改善の効果を追求していく予定である。教員の授業の改善への意欲を高めるためには、地道に授業開発、改善をしている教員を評価するシステムが必要である。

#### 5. 高学年次生の共通教育の評価(8)

共通教育をほぼ修了した学生により共通教育がどのように捉えられているかは、共通教育全体を改善するために重要である。2002(平成14)年に平成13年度の3年生にたいして共通教育に関するアンケートを実施した。回収率は70.9%(1148人中814人)であった。アンケート項目を表2に示す。

表2. 平成14年度 3年生に対する全学共通教育アンケート調査 項目

●裏面の記入例に従って、各項目の評価値(数字)をマークカードに鉛筆でマークしてください。「そう思う[5 4 3 2 1] そうは思わない」の数値は、「5:そう思う, 4:どちらかといえばそう思う, 3:どちらともいえない, 2:どちらかといえばそうは思わない, 1:そうは思わない」を意味します。他の質問でも同様の評価値で記入してください。

【共通教育全般について】

- 1 シラバスに書かれている内容と異なる授業は何科目ありましたか。
- 2 理解しにくい授業は何科目ありましたか。
- 3 よく準備され工夫されていると思う授業は何科目ありましたか。
- 4 興味がわいて印象に残った授業は何科目ありましたか。
- 5 授業に毎回出席するように心がけましたか。
- 6 授業を理解するために、予習・復習などの努力をしましたか。
- 7 専門科目に比べて単位の取得は簡単でしたか。

【教養科目について】

- 8 シラバスを事前によく読んでから科目を選択しましたか。
- 9 第一希望どおり選択できなかった教養科目は合計いくつありましたか。
- 10 将来の専門に役に立ちそうな科目から選択しましたか。
- 11 興味のある科目から順番に選択したと思いますか。
- 12 単位の取得の容易な科目から選択しましたか。
- 13 期末試験をしない科目を優先して選択しましたか。
- 14 出席を取らない科目を優先して選択しましたか。
- 15 勉強してみたいと思った科目で本学で開講されていないものはいくつありましたか。
- ★開講してほしい科目名あるいは科目の内容を、マークカードの裏面に書いてください。
- 16 自然・人文・社会の三分野の科目がバランスよく履修できたと思いますか。
- 17 教養科目を受講して専門分野の基礎となる学問的素養の向上に役立ったと思いますか。
- 18 情報科目は情報処理能力の向上に役立ったと思いますか。

【外国語科目について】

- 19 英語の授業は英文を読む能力の向上に役立ったと思いますか。
- 20 英語の授業は英語で文章を書く能力の向上に役立ったと思いますか。
- 21 英語の授業は英会話の能力の向上に役立ったと思いますか。
- 22 英語の授業はあなたの語学能力に見合ったレベルでしたか。
- 23 希望する第二外国語(独語, 仏語, 中国語)を選択できましたか。
- 24 第二外国語を通じて、その国の文化に触れることができたと思いますか。

【健康スポーツ科目について】

- 25 健康・体力を維持増進するための自己管理能力が養われましたか。
- 26 スポーツを通じて、社会的コミュニケーション・スキルを学ぶことができましたか。

【基礎教育科目について】(基礎科目を選択していない場合は、記入しないで下さい)

- 27 基礎数学は専門分野の基礎として役に立っている(あるいは将来役に立つ)と思いますか。
- 28 基礎物理学は専門分野の基礎として役に立っている(あるいは将来役に立つ)と思いますか。
- 29 基礎化学は専門分野の基礎として役に立っている(あるいは将来役に立つ)と思いますか。
- 30 基礎生物学は専門分野の基礎として役に立っている(あるいは将来役に立つ)と思いますか。

学生による共通教育に関するアンケートから明らかになったことは次のようなものであった。

教養科目全体の満足度は概ね高く、教員の教え方も問題は少なく、授業の内容には興味ももてるとして、学生の評価は高く、また学生の授業への出席なども良い。しかしながら、学生が自ら勉学に費やす時間が少なく、単位の取得については容易と考えられている。

つまり、学生の自学自習を促すように授業を構成することが重要になっている。教員が一層授業改善するために情報交換や相互FDなどが必

要となっている。この点で、本年度(2005年12月)に実施した、授業の相互参観は1つの試みである。また同時に、学生の自主的な学習の環境も整えること、学習支援を強化することなどが必要である。

このアンケートの報告書では、それぞれの質問項目について、今後、徳島大学における全学共通教育をどのように改善していくかについてのたたき台を簡単に示している。それらの内、主要なものを改善事項とそのために対策指針を含めて以下に示す。

改善事項	対策指針例
・ 授業内容に即したシラバスの記載	> 教員の改善
・ 理解しやすい工夫された授業への改善	> 教員の授業改善
・ 成績評価の厳格化と GP の導入	> 成績評価の指針の設定
・ 授業への出席、予習・復習の促進	> 学生への課題提示、授業方法の検討
・ 一部の授業を大教室で実施	> クラスサイズの適正化
・ 様々な授業でパソコンに接する機会を持たせる	> パソコンを使う授業の設定
・ 能力向上が実感できるように英語教育を改善	> コミュニケーション英語の導入
・ 英語の能力別クラスの編成	> TOEIC などのレベル設定
・ 初修外国語の選択の自由度を増やす	> 新たな外国語科目の設定
・ 基礎科目が専門に役立つことを提示	> 基礎科目は専門との連携

これらの中で、この2、3年で改善されたもの、或いは改善されつつあるものもあるが、全体として、一層の改善努力が必要である。

## 6. 授業評価アンケート結果のフィードバック

授業評価アンケートの結果を授業改善につなげるためにはフィードバックが欠かせない。フィードバックには、担当教員へのものと学生へのものがある。担当教員へのフィードバック(報告)については、「学生による授業評価の導入」の項に述べた。ここではアンケートをした学生に対するフィードバックに関して述べる。

学生に対して授業評価アンケートの結果のみならず共通教育の改善や問題点の全般にわって

報告をしたり、意見交換をしたりすることは重要である。しかしながら、共通教育は、学生の範囲が明確な学部学科と異なって、学生の範囲が不特定のであるため、組織的対応がし難かった。2003年度から「学生と教員で考える全学共通教育」として全学共通教育FD懇話会を開催して、授業評価アンケートの結果、共通教育のカリキュラム改訂、共通教育の施設の改善などについて、学生へ報告し意見交換を行っている。学生の集まりが十分でないので、今後は、2005年度に大学教育委員会において検討され設置された「教育の質向上のための学生ワーキンググループ」とタイアップして良い懇話会を継続的に実施していくようにしたい。この全学共通教育FD懇話会の話題に関



しては、「全学共通教育FD懇話会」の項に後述する。

授業評価アンケートについては、学生はどの教員がどんな授業を展開して、他の学生の評価はどうか気になるであろう。授業の受講選択の参考になるような良識的な授業評価の情報が提供できると良いと考えるが、「個人情報保護法」などもあり工夫が必要である。各担当教員が自ら自分の評価結果を示す仕組みも考えられる。統計的に整理された、アンケート結果については、ホームページにて公表するように計画中である。

学生による授業評価によりどれだけ授業が改善されたかについて、定量的なデータが必要とされているが、十分な計測はできていない。しかしながら、先に「学生による授業評価の導入」の項で述べたように、このような授業評価をする以前を想定すると、ある意味で各授業の一端が見えるようになり、全体としては、授業の実施や内容などの点で改善がなされていると考えられる。一方

で、授業評価をすることについても、学生にその意義や効果を示し適切な導入をすることも大切で、入学式後の大学入門講座などに取り入れる必要もある。その為には、一層授業評価の授業改善への効果、教育(学び)における意義を明確にしていくことが大切となっている。

### 7. 授業実施報告書の提出と授業改善の試みに関する調査

教員がどのように授業改善を行っているかに関しては、毎学期提出される授業実施報告書や授業改善の試みに関するアンケート調査によりその状況を知ることができる。

#### (1) 授業実施報告書の提出

個々の授業を教員がどのように実施したかについて、報告を求めている。毎回の授業を終え振り返って、良かった点、問題を感じた点、改善点などを教員自ら整理するために良い仕組みであると考えている。その項目を表3に示した。

表3. 授業実施報告書の項目

授業実施報告書	
担当教員(授業実施報告書)	
****年度前期, 後期 毎学期提出(ほぼ100%)	
教員の授業実施に関する責任と自己点検の材料として期待している。成績評価法, 学生の成績分布, 授業実施回数などが当面のチェック項目。もっと簡素化を検討中。	
【授業科目区分】(何れか×印)	
1 教養科目	( <input type="checkbox"/> 人文科学分野 <input type="checkbox"/> 社会科学分野 <input type="checkbox"/> 自然科学分野 <input type="checkbox"/> 情報科学分野 <input type="checkbox"/> 総合分野 <input type="checkbox"/> 学部開放分野)
2 外国語科目	( <input type="checkbox"/> 英語 <input type="checkbox"/> ドイツ語 <input type="checkbox"/> フランス語 <input type="checkbox"/> 中国語)
3 健康スポーツ科目	( <input type="checkbox"/> 実習 <input type="checkbox"/> 演習)
4 基礎教育科目	( <input type="checkbox"/> 基礎数学 <input type="checkbox"/> 基礎物理学 <input type="checkbox"/> 基礎化学 <input type="checkbox"/> 基礎生物学 <input type="checkbox"/> 基礎物理学実験 <input type="checkbox"/> 基礎化学実験 <input type="checkbox"/> 基礎生物学実験)
5 日本語・日本事情科目	( <input type="checkbox"/> 日本語 <input type="checkbox"/> 日本事情)
【授業回数】(予定回数 ****年度 前期: 月 15回, 火 15回, 水 15回, 木 15回, 金 15回(試験期間を含む。))	
授業実施回数	回(試験期間を含む。) 休講回数 回 補講回数 回
【受講者数, 成績分布等】	
履修登録者総数:	人
学年別履修登録者数:	1年 人 2年 人 3年 人 4年 人

成績別単位取得者数：60～69点 人 70～79点 人 80～89点 人 90～100点 人  
左記の合計 人

【成績評価および授業に関わる基本的な質問事項】

- 1) 授業では出席確認を行いましたか(何れかに○印)。
  1. 毎回実施した
  2. 6回以上実施した
  3. 3～5回実施した
  4. 1～2回 実施した
  5. 実施しなかった
- 2) どのような方法で成績評価を行いましたか(該当項目に○印, 複数回答可)。
  1. 期末試験
  2. 中間テスト・小テスト(回数 回)
  3. 期末試験に代わるレポート
  4. 授業中の課題レポート
- 3) 授業の実施状況, 授業の方針, 授業方法の工夫等について, 具体的にご説明ください。
- 4) 予習, 復習を促す工夫について
- 5) 成績の評価基準について

【学生に関する評価】

当該授業科目に関して, 下記の質問項目について, 「その通り」を5, 「全く違う」を1とする5段階で評価し, 該当する5～1までの数値を右端の空欄に記入してください。

A. 学生の受講態度

- 1) 学生の出席状況は良かった ..... [ ]
- 2) 学生から質問がよくあった ..... [ ]
- 3) 学生は与えられた課題や予習・復習を行ってきた ..... [ ]
- 4) 総合的に判断して, この授業への学生の取り組みは十分であった ..... [ ]

B. 総合的評価

- 5) 受講学生は授業を理解したと思われる ..... [ ]
- 6) 授業内容に対して学生の興味・学習意欲は高まったと思われる ..... [ ]
- 7) 学生はこの授業に価値があったと思っている ..... [ ]

(2) 教員の授業改善に関する調査(9)

約4割の回答率と推定できる)。

教員の授業改善の試みに関する調査を2002年3月に非常勤講師を除く共通教育担当教員に対して実施した。210授業の担当者から回答を得た(総合科学部担当の授業数は概ね500であるので,

回答教員数を分野別に見ると, 大体各分野の担当教員数の割合にほぼ対応している。以下, 4つの設問に関してまとめておく。

表4 教員の授業改善の試みに関する調査の設問項目

表4(a)「授業で, 特に重点を置いている教育目標」

1. 社会的規範意識や倫理性の育成
2. 高い責任感を持って判断し行動できる能力の育成
3. 自らの文化に対する理解の促進
4. 世界の多様な文化に対する理解の促進
5. 課題について図書や資料で調査する能力
6. 論理的な文章を書く能力の育成
7. 発表能力の育成
8. 討論能力の育成
9. 課題発見能力の育成
10. 情報リテラシーの向上
11. 科学的思考力の育成
12. 諸科学を超えた学際的な思考力や知識の習得
13. 芸術鑑賞能力の育成
14. 芸術的な表現能力の育成
15. 身体運動能力の向上
16. 健康な生活を営むための知識や能力の習得
17. 環境問題に関する理解の促進
18. 国際関係に関する理解の促進
19. ジェンダー問題に関する理解の促進

20. 現代社会の諸問題に関する理解の促進    21. 職業観の育成    22. 人間関係能力の向上  
 23. 自己発見の援助    24. ボランティア意識の育成    25. 高等学校程度の内容の知識の補完  
 26. その他(簡潔に記述してください)

表4(b)「授業での工夫について」

- a) 各々の学生の個人差に対応した授業    b) 明快でわかりやすい話し方  
 c) 学生に身近な話題を取り上げる    d) 学生のための配布資料の工夫  
 e) 教材や資料の提示の工夫    f) 受講者への課題の与え方(提出物など)の工夫  
 g) 学生の学習状況を調査し、授業にフィードバックする(アンケートなど)  
 h) 学生が主体的に参加できる形態の授業の導入    i) 現実、本物に触れる機会を作る  
 j) 高校での教育との連携をはかる。    k) 教室での雰囲気作りの工夫  
 l) コンピュータの活用    m) 各回の授業ごとの目標を、授業の始めに明示する  
 n) その他(簡潔に記述してください)

表4(c)「学生の自学自習を促進するための工夫」

- a) 毎回の授業で具体的に予習・復習の指示をしている(次回の授業までにやっておくべきことなど)  
 b) 宿題を出し、こまめに添削し、返却している。  
 c) 各授業の始めに、予習状況のテストをしている。  
 d) 授業の参考図書を指定し、次に授業までに読んでおくべき箇所を指示している。  
 e) 授業のホームページを開設し、予習・復習の課題を提示している。    f) その他(簡潔に記述してください)

(a)「授業で、特に重点を置いている教育目標」について

表4(a)に示した選択肢の中から、教養科目人文科学分野では、「自らの文化に対する理解の促進」が第1位、社会科学分野では「現代社会の諸問題に関する理解の促進」、自然科学分野では、「科学的思考力の育成」が第1位となっており、きわめて常識的な結果といえる。

外国語科目では、34名中22名が「世界の多様な文化に対する理解の促進」を教育目的に掲げているが、11名の方はあげた選択肢に当てはまらない回答を記述している。

(b)「授業での工夫」について

表4(b)に示した項目について、工夫の度合いを問うた結果、「大に行っている」との回答を得た項目は、概ね、b)「明快でわかりやすい話し方」およびc)「学生に身近な話題を取り上げる」に集中していた。それらについて、d)「学生のための配布資料の工夫」や、m)「各回の授

業ごとの目標を、授業の始めに明示する」との回答も多かった。また外国語科目では、k)「教室での雰囲気作りの工夫」という回答も目立っていた。

(c)「学生の自学自習を促進するための工夫」について

表4(c)に示した項目について、工夫の度合いを問うたが、この設問について、明らかな点は、学生の自学自習の促進のための工夫を「大に行っている」という回答自体が極めて少ないことである。学生の自学自習を促進することは容易でないが、担当教員による上記の回答傾向は、先に述べた3年次生へのアンケートの結果で自学自習の時間が極めて少ないという学生の側の学習態度にも対応するものになってきている。個々の教員が何らかのかたちで自習を促す工夫を行うばかりでなく、共通教育の枠組み全体の中で、学生の自学自習を促し、学習を活性化させるための対応が求められていると考えられる。

(d) 「成績評価の方法」について

各教員が授業で行っている成績評価の方法を、次の8つの項目から選択してもらった。結果は、1) 期末試験(23.8%), 2) 小テスト・中間テスト(29.5%), 3.) 学期末のレポート(29.0%), 4) 授業中の課題レポート(14.8%), 5) 学生の発表・報告, 6.) 学生の授業への参加態度の所見, 7) 出席回数, 8) その他, のようである。

また、回答者の76%近くの教員が、2つ以上の成績評価の方法を組み合わせ、成績評価を行っていることがわかった。

授業改善、授業での工夫については、相当数の教員によって行われていることが明らかになった。今後も授業実施報告書により改善状況を追尾していくことが必要である。

8. 教員の授業力開発(ファカルティ・ディベロップメント:FD)

ファカルティ・ディベロップメントには、教員の授業力開発の狭い意味と組織的に検討されるカリキュラム開発や授業開発をも広く含まれるが、当初は狭い意味のFDを実施すべきものとして強調された。これは大学の教育がエリート時代からマス時代、ユニバーサル時代となるに従って、教育の目標は達成すべき事項を上げてそれを実現し、学生の気質の変化に対応するためには、大学の教員の授業力養成、開発が必要になってきたためである。

先に述べたように、徳島大学におけるファカルティ・ディベロップメントは1993年に既に開始されていた。表1に示したように、初期の頃には教員の授業力開発(ファカルティ・ディベロップメント)として講演会、シンポジウム形式で行われ、そのテーマは共通教育のあり方や現状報告などが主なものであった。

その後、教員の授業力開発に関しては、本格的な全学的FD推進プログラム第1期の3年計画

が2002年度から実際されて本格化した。全学FD推進プログラム(第1期)について大学開放実践センターが中心となって実施されて、特に、初任者はほとんどの場合、合宿研修による基礎プログラムにおいて、大学での授業実施の基本的事項を体験型の研修を受けることとなり、3年間で約100名内外の教員が研修を受けたことは、共通教育に直接関わる場合は少ないかもしれないが、大学全体としては大変意味のあることであった。その他にも、FD推進プログラムは、成果をあげて、2005年度より第2期のプログラムに移っている。

全学FD推進プログラムについては、大学開放実践センターのホームページに詳しい(13)。第1期3年計画(2002, 2003, 2004年度)の概略は、それまでの講演会、シンポジウム形式からワークショップ形式のFDに重点を移し、実践的FDプログラムとなった。

- ・FD基礎プログラムは、新任教員の合宿ワークショップで、教養科目の授業作り(授業題目は様々で、「恐竜はなぜ死滅したか」、「壮年期」、「現代における恋愛」、「漫画大衆文化論」など)を実施した。

- ・FD応用プログラムでは、授業のビデオを撮影して、それを素材に授業方法について検討会を行うものである。対象となる教員の専門教科の授業(「電気回路2」、「カウンセリング論」、「CGシミュレーション」、「性の決定」他)を対象として検討会が年に複数回開催された。授業改善のためには、非常に有効な手法である。

- ・授業エキスパートワークショップでは、FDハンドブック(HB)作成を作成することとして、既に第3冊まで作成されている。内容は、「シラバス作成HB」、「わかりやすい講義の仕方HB」、「よりよい成績評価の仕方HB」、「授業改善のための授業研究会運営HB」を初めとして、11のテーマについてハンドブック化されている(14)。

表1のように整理してみると、より個別の授業や教員個人の授業力などに焦点が移ってきているのが、2001年、2002年辺りからである。それ

までは、少し組織や科目、在り方などのテーマが取り上げられていた。

FDに関しては、現在実施されているプログラムは重要である。しかし一方、教員のFDに対する関心が薄れているように感ずるので、教員の教育への意識改革の面での広がりを作るのが求められているのではないだろうか。第2期3年計画に期待したい。

英国、ドイツなどでは既に大学教育法に関する資格が義務づけられる方向である。基本的な授業実施の方法等についての研修が必要であり、いざれ相互研修、再教育研修も考えられるであろう。大学の教育全般に関して、コンセンサスが必要となっており、それを明確にするためにも全学的FDの重要性が増している(15)。

### 9. 全学共通教育FD懇話会

最近では、授業評価アンケートの結果を学生にフィードバックする観点もあり、学生を交えて全学共通教育FD懇話会(学生と教員で考える共通教育)を開催している。共通教育の新カリキュラムに関する意見なども交換した。全学的なFDシンポジウムなどを実施してきたが、初心に戻り、2002年度に全学共通教育センターとしての第8回全学共通教育FD懇話会「共通教育の授業評価と新カリキュラム」を実施した。2003年度には、学生を交えて懇話会を開催した第9回「全学共通教育FD懇話会(学生と教員で考える共通教育)」を、また2004年度には、第10回「全学共通教育FD懇話会(学生と教員で考える共通教育)」を実施している。最近のFD懇話会の流れとテーマは次のようなもので、学生との意見交換の場を広く設定するように計画された。

第7回全学共通教育FD懇話会1999.10

「工学教育における専門教育と共通教育」

第8回全学共通教育FD懇話会2003.3

「3年生に対する全学共通教育アンケート結果について」

「全学共通教育の担当教員を対象としたアン

ケート調査について」

「全学共通教育の中期目標・中期計画と新カリキュラム(案)」

第9回全学共通教育FD懇話会(学生と教員で考える共通教育)2003.6

「学生による授業評価アンケート報告」

「新カリキュラム(案)について」学生との対話の重要性

「学生からみた全学共通教育(学生代表)」

第10回全学共通教育FD懇話会(学生と教員で考える共通教育)2004.10

「第1回東中四国教育改善学生交流シンポジウムワークショップ」報告

「平成15年度学生による授業評価アンケート報告」

「ワークショップ「学生参画型の大学教育・学習改善の可能性」」

これらの試みは、先に図1に示した、授業改善のシステムの一環にあり、このサイクルを効果的に開催して、学生の自主的な関わりを醸成していくことがより重要となっている。

### 10. 結びにかえて—今後の課題—

学生による授業評価アンケートは、授業改善のシステムの要素として重要であり、また関連した学生、教員へのアンケートについてもその概略をまとめた。これらによって、共通教育の現状把握ができ有効であるが、まだまだ十分に改善に生かされていると言い切れない。改善に生かさなければ、せっかく多くの学生、教員が協力してくれたアンケートが無駄になることを肝に銘じておくべきである。

今後、大学の評価は益々厳しくなる。国立大学法人評価、認証評価機関による評価、各種の外部評価(工学系JABEE)等、教育面のみでなく、研究、社会貢献などの観点も含めて幾重にも評価が行われる。そのために絶えず、根拠データとしてのアンケート調査が行われるであろうが、先に述

べたように、実際に改善や教育の質や成果が上がらなければ意味のないことである。

徳島大学としては、現在、大学教育委員会の下に、「教育の質に関するワーキンググループ」、「教育の質の向上のための学生ワーキンググループ」、「2006年問題検討ワーキンググループ」が様々な検討をおこなっており、改善の実が上がってくると期待する。また、特に、学生ワーキンググループは学生の大学内における教育を受ける者としての立場を明確にし、自分たちが受ける教育について、より自主的で活発な関わりを形成するように期待している。

#### 参考資料

- (1) 教養部「一般教育に関する調査報告書」(1992)
- (2) 全学共通教育専門委員会「第1回全学共通教育懇話会」報告書(1994)
- (3) 自己点検・評価委員会「新たなる教養教育をめざして」学生・教員アンケート(1996)
- (4) 「私たちの全学共通教育—学生による授業評価を中心に」学生アンケート(1998)
- (5) 徳島大学全学共通教育外部評価報告書(1998)
- (6) 全学共通教育センター「外国語教育改善のためのアンケート」(2000)
- (7) 大学評価・学位授与機構による全学テーマ別評価「教養教育」自己評価書(2002)
- (8) 全学共通教育センター「3年生に対する全学共通教育アンケート調査報告書」(2002)
- (9) 全学共通教育センター「全学共通教育の授業に関するアンケート調査報告書」(2002)
- (10) 全学共通教育センター「学部教員の共通教育に関する調査報告書」(2002)
- (11) 松谷, 平井, 佐竹, 桑折 「全学共通教育の現状と課題—学生による授業評価アンケート調査の分析から—」大学教育研究ジャーナル(2005) Vol.2, 13.
- (12) 松谷, 桑折, 佐野「授業方法に関する中間アンケートの効果分析—授業評価の新たな試みと課題」大学教育研究ジャーナル(2006) Vol.3, 30.  
松谷, 桑折「授業評価アンケートの効果分析と教養教育の課題」大学教育学会(2005.6)
- (12) 河合塾「学生による授業評価」事例研究会報告書(2003)
- (13) 全学FD推進プログラム・FDが結ぶ徳島大学・教育ネットワーク  
<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/FD/index.html>
- (14) FDハンドブック第1集  
第1巻 シラバス作成ハンドブック, 第2巻 わかりやすい講義の仕方ハンドブック, 第3巻 よりよい成績評価の仕方ハンドブック, 第4巻 授業改善のための授業研究会運営ハンドブック  
FDハンドブック第2集  
第5巻 ビジュアル教材作成ハンドブック, 第6巻 プリント教材の作り方・使い方ハンドブック, 第7巻 テスト問題・レポート課題作成ハンドブック, 第8巻 授業評価アンケートの作り方・フィードバックの仕方ハンドブック  
FDハンドブック第3集  
第9巻 レポート作成指導ハンドブック, 第10巻 ティーチング・アシスタント(TA)活用ハンドブック, 第11巻 授業改善のための実例集ハンドブック(CD-R付き)
- (15) 大学教育学会課題研究集会(2005)新潟大学  
上記の報告書等の(7), (8), (9)は、全学共通教育センターのホームページに収録されている。  
<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/ceducom/material.html>  
<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/ceducom/analysis.htm>